

Japanese man In NY (ニューヨーク生活)



Photo: New York Police Car

《へ〜ルプ!》

今回はちょっと危なかった話。

幸いニューヨークで生活していた4年間に個人的に警察にお世話になることはなかったが、強いて言えば、それ以前、21歳の時に約40日間のアメリカ一周旅行をした時のこと。ナッシュビル〜メンフィス間でレンタカーを運転していた際、ナッシュビルのダウンタウンにあった銀行に立ち寄っていたほんの数分の間に、駐車違反の張り紙を貼られたことがあった。一瞬どうしようか迷ったものの、英語だし、地理的にも不慣れで、何だかんだ面倒だったので、その場で張り紙を丸めて捨てて来てしまったが、その2年後に無事入国でき、ニューヨークの地を踏めたので、手配はされていなかった様だ。

だが、ニューヨークのレストラン仲間には結構危ない経験をした者がいる。まずは、現在は鹿児島で飲食店のオーナーをしているS。彼は20代前半の時に鹿児島からニューヨーク

に渡って来たが、その時に持参した所持品は小さなバックにお気に入りのCD10枚程とシャツと下着数枚のみだったという逸話を持つ。勿論、単なるニューヨーク小旅行でなく、これからレストランで働きながら生活するためにやって来たのだが…。そんなSだが、英会話能力はほぼゼロに等しかったものの、その後もキッチンで働きながら、数年間ニューヨークに住み続けることになる。そんなSがある日、イースト・ヴィレッジを歩いていた。運悪くちょうどアジア系のドラッグの売人等の取り締まりでもしていたようで、路上を歩いていたSが警官に声を掛けられた。黒人の警官だったのか、いずれにしても、英語がほとんど聞き取れなかったSはただ歩いていただけで悪いことなど何もしていないのに、咄嗟に走り出してしまった。結局、逃げ切れる筈もなく、警官に羽交い絞めにされてアスファルトに押し付けられて御用となった。勿論、Sは何も悪さはしていなかったため、警察署に一泊だけお世話になり、翌日レストランのマネージャーHさんが身柄を引き取りに行き事なきを得たが、そんなことがあっても結構ケロッとしていたS。彼とはニューヨークでもいろいろな思い出があり、今も交流が続いている。

あと、同じくレストランのバーテンダーをしていたMさん。Mさんは当時パークリー音楽大学に通い、オペラを勉強していた。そのMさんがディナー勤務を終えたある日の深夜過ぎ。いつものようにウエスト45丁目からタイムズ・スクエア駅に続く階段を降りて行った際に、一瞬階段途中のくぼみに黒人の人影が見えたそうだが、そのまま降りて行った。だが、すれ違いざま、いきなり背後からスリーパーホールドのような形で腕で首を締められたそう。その黒人も体が随分大きかったのだろう、そのまま10数秒も締め上げられたら間違いなく気を失うか命に別状があったかもしれない。だが、「芸は身を助ける」とはこういうことを言うのだろう。瞬時に日頃からオペラで鍛えた喉がものを言った。階段から地下道に響くMさんのオペラ調の「へ〜ルプ!」の美声。その声気付いた人たちが異変に気づき、また、首を締め上げていた黒人もたまげたのだろう。直ぐに首を締め上げていた腕を振り払って、その場から逃げ去ったようで、その後Mさんも無事に帰宅した。一緒に現場にいたわけではないので、「へ〜ルプ!」の美声がどれだけ響いたのかは知りえないが、実に危ない出来事だった。そんなMさんの十八番、夜更けのマンハッタン・コリアン街に立ち並ぶカラオケ店に響いた「スタンド・バイ・ミー」の歌声がとても懐かしい。

ニューヨークの警官といえば、レストランで大変お世話になったOさんの友人に私服警官がいた。週末のイースト・ヴィレッジのバーで度々一緒になる機会があったが、映画に出てくるような革ジャンにジーンズといったラフなスタイルとワイルドな顔つき。どう見ても警官には見えなかったが、かなり凄腕の私服警官だったようだ。他にも、レストランの前を通りかかった酔っ払った白人の男達と乱闘騒ぎがあったりもしたが、いろいろな事があつた中で命を落とすような仲間がいなかったことは幸いだ。